

令和2年2月20日

平成31年度博士論文審査委員会審査報告書

<審査委員会>

委員長	教授	黄 在南	印
委員	教授	津曲 隆	印
委員	教授	望月信幸	印



1. 学位申請論文名

日本の農業経営と農業知識移転の歴史的考察

2. 学籍番号および氏名

1385003 宮田 晃宏

3. 論文の概要

本論文の主なテーマは農業経営者の育成に関する歴史的考察であるが、そのさい研究課題としているのが日本の農業経営と農業知識移転の歴史的考察である。それには、二つの大きな理由がある。一つは、個人経営や家族経営が主流となっている日本の農業の現状を考えると、人材とりわけ経営者の優劣が経営に与える影響が一般企業よりもはるかに大きいと言わざるを得ないことから、まずは日本の農業において個人経営や家族経営が主流になった歴史的経緯を、もう一つは、一般的にいて人材の育成にはどのような知識をどのように移転するかという「必要とされる知識の形態と移転」に関する教育的な観点が要求されることから、農業経営者の育成についてもこのような教育的な観点から歴史的な考察を行いその構造的特徴を、解明する必要があると考えたからである。

本論文は、全5章から構成される。第1章では、本論文の現代的意義を示すとともに、農業経営者の育成に関する先行研究のサーベイを通して本論文の研究課題の新奇性・独創性を確認する。さらに時代ごとに必要とされる農業知識の形態と移転について探究を進めるための準備作業として、知識に対する理論的考察を究めたい本論文の構成の枠組みを構築する。その際、本論文のキーコンセプトとなる「フィールドの知」に対する理論的考察を行うとともに、農業における「フィールドの知」の必要性と重要性に対する、農学の認識不足が農業教育に与えた否定的な影響を本論文の問題意識として措定する。第2章からは、第1章で構築された枠組みをベースに、時代ごとの農業経営と農業知識移転の特徴について探究を行う。第2章では弥生時代後期から江戸時代後期までの、第3章では明治

時代初期から第二次世界大戦終了後までの、第4章では第二次世界大戦後から平成時代前期までの、第5章では平成時代中期以降の、農業経営と農業知識移転の特徴についてそれぞれ探究を行う。特に、第5章においては熊本県内の農業経営者に対してアンケートとインタビュー調査を実施し、指定した問題意識の検証を行う。

本論文で確認された日本の農業経営の特徴は一貫して家族経営が主流であり、経営規模が零細であるということであるが、日本における家族労作的な小規模経営の原型は江戸時代までにすでに成立していたことを明らかにする。ただし、平成時代中期以降は、規模の大きい経営体が増加し脚光を浴びていることを指摘しながら、これまでのように家族的な農業経営を強化し支えていく考えで現在の日本の農業が抱えている様々な難問を乗り越えられるかについては疑問を提示する。

農業知識移転の特徴については、学校教育がなく人材育成の中心を担ったのが「老農」と「農書」であり、移転される知識の中心が「フィールドの知」であった江戸時代後期までの時代を除けば、学校教育が始まった以降の各時代においては「科学的な知」が優先され、より現場中心の「フィールドの知」に対する正当な評価が行われてこなかった構図を明らかにする。この構図は、各時代の農業経営に求められる知識の内容が変遷していく中でも、依然として変わってないことに本論文は注目する。ただし、このような問題点を克服しようとする学校教育のいくつかの事例も紹介し、「フィールドの知」を組み込んだ日本の農業教育と農業経営者育成の新しい可能性を見出している。

#### 4. 審査の結果

本審査委員会は、下記の点を中心に、本論文の内容が「博士（アドミニストレーション）の学位授与の基準」（平成13年12月13日研究科委員会設定）を満たしているかについて、審査した。

- 1) 外部評価に耐えうるような水準の学位論文であること
- 2) 学位論文の分量（120,000字以上）
- 3) 原則として、一か国語以上の外国語文献を参照していること
- 4) 学界への寄与、研究の新奇性・独創性、ならびに資料を丹念に手堅く渉猟・検討し、事実を単に記述するだけでなく、理論的かつ系統的に説明できること

その結果は、以下の通りである。まず1)については、第77回日本農業教育学会大会（北海道教育大学旭川校にて令和元年9月7日（土）～9月8日（日）開催）において「日本の農業経営と農業知識移転の歴史的考察」というテーマで本論文の一部を発表し学会誌への論文投稿を勧められるなど、本論文のテーマの学問的意義・研究課題・研究内容について評価されているので、基準を満たしていると考えられる。2)については、論文の分量がページ数で延べ260ページを超え字数では280,000字程度になっているので基準を満たして

いると考えられる。3) については、外国語文献3本を参照しているので、基準を満たしていると考えられる。4) については、農業経営に求められる農業経営者に関する研究といえば、いわゆる成功した農業経営者の「農業経営者論」に一部その例はあるが、農業経営者の育成という観点から実際の経営者に求められる能力とその育成方法が果たしてマッチしているか否かに関する研究はあまり例がないところに、基準を満たす根拠があると思われるが、単に研究の例が少ないということで当の研究の学界への寄与、研究の新奇性・独創性などが保証されるわけではない。もう一つクリアしなければならない条件として、社会科学の論文として、本論文が志向している研究課題の学問的妥当性がどのくらい確保されているかをみる必要がある。その際、英国の社会学者アンソニー・ギデンズのいう社会科学の社会的な役割の三つの局面に照らし合せると、いまの日本の農業問題の根幹ともいえる、農業の後継者や経営者をいかに育てるかという課題について本論文で行った研究内容は社会的な課題としての学問的妥当性を十分おびているといえる。これらのことは第77回日本農業教育学会大会での発表を通して確認されている。

上述の理由から、全体として本論文が、明らかに学界の発展に少なからず寄与し、さらに今後も学界に貢献しうる論者の力量を実証するに足る労作であることは、審査委員が一致して認めるところである。以上の審査結果により、本審査委員会は、本論文は学位申請論文に値するものと判断する。